



# 日本比較文学会九州支部 NEWSLETTER

2025 年 11 月 18 日発行  
第 7 号

日本比較文学会九州支部 HP: <https://homepagekumadai.wixsite.com/kyushu-shibu>  
日本比較文学会九州支部事務局: 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744  
九州大学大学院比較社会文化研究院 松枝佳奈研究室  
[matsueda.kana.460@m.kyushu-u.ac.jp](mailto:matsueda.kana.460@m.kyushu-u.ac.jp)

## 目次

p.1 巻頭言(石川 泰成)

## 巻頭言 筆後の修養

p.2 「もう三〇年、  
まだ三〇年」(波潟 剛)

石川 泰成 (九州産業大学)

p.3 書評(松枝 佳奈)

p.5 春季大会印象記  
(林 信蔵)

p.7 秋季大会プログラム

論文を書く場合、「意は筆前に在り」とテーマや構想が先にあるわけですが、行論上どうしても議論を削いだり、まとまらず次回の機会に先送りしたりと、毎回、書き終えて心残りとし己の力不足を感じます。今春発行の『比較文学論集』に、私は江戸時代の文人と朝鮮通信使との詩文交流に関する論考を寄せましたが、実際の作品を取り上げた作品論にまで至らず、今回も憾みを残しました。筆後の修養と言えば聞こえが良すぎますが、先の闕をいささか補おうと筆を執ります。正徳年間(1711)、荻生徂徠の弟子、山県周南は朝鮮通信使との詩文を『問槎畸賞』を発行しました。この詩文集には、行間に中国語の詩文評があり、批評者は護園派を率いる総帥荻生徂徠とされています。彼は、朝鮮通信使で作詩文を担当する製述官、李東郭の詩に「巧みのようだが、かえって不恰好さはこのとおり。宋人の面目憎むべし」と宋代の詩風がまずもって気に入らない様子です。さらに「東郭の詩、これが一番だが、村気に満ちている。」とこき下ろします。「村気」とは、洗練されていない格調の低いこと。徂徠は「村気」と同義で「俚語」も使い、李東郭が日本人との出会いを「人々は外国の客を敬して、おおらかに対応してくださり、詩人たちは逢えば皆さんはにこやかな顔でした」と追従の句を詠むと、「俚語もはなはだしい」と徂徠は手厳しく評価。ほかに書記嚴龍湖の詩に「朗吟のさま、よき顔立ちに對面したようです」と形容したところに、徂徠は「俚甚だしい」、つまり詩の整い方をイケメンに見立て通俗的だと非を鳴らします。これらは徂徠の詩論である、宋代の詩風を嫌い、明の李攀龍・王元美を規範とし、「陽春白雪(格調高く雅びな詩歌)」や「芙蓉白雪(富士山のように高い格調と清雅さ)」なるものが佳詩だとする考えに基づきます。

(次ページにつづく)

---

"筆後の修養と言えは聞こえが良すぎますが、先の関をいささか補おうと筆を執ります。"

---

(前ページのつづき)

反対に格調の低いものを「村気」、「俚」と非難するわけです。一方、自分の弟子、山県周南の詩には「これこそ、私が言う芙蓉白雪の高さである。」と絶賛し、「雄々しく峻厳なること、王元美も超えられない」と、徂徠たちが規範とする明の王元美の詩を越える佳作と、これはさすがに褒めすぎの感さえあります。これらは世間の読者に向けたケレン味で、読者も私のサークルに入ればここまで詩作が上達しますよ、と徂徠が得意な自己宣伝や詩壇での勢力拡大を狙った意図も透けて見えます。徂徠の詩文批評は、まだ沢山ありますが、いずれの機会にまた。今回も筆後の修養を期して筆を擱く結果となりました。

## 「もう三〇年、まだ三〇年」

波瀾 剛（九州大学）

二〇二五年七月末、国際比較文学会がソウルで開催され、私も発表者の一人として参加した。今回は、自分自身の研究テーマの発表ではなく、日本比較文学会と韓国比較文学会のジョイントセッションのメンバーとして、教育と社会的インパクトという側面から比較文学を論じるというリクエストに基づいて報告を行った。なかなか難しい課題だと思ったが、昨年度まで研究分担者となっていた研究プロジェクトの調査結果や、編者の一人として出版した『比較文学比較文化ハンドブック』の内容を紹介しつつどうにか役割を果たした（と思う）。社会的インパクトに関しては正直心もとなかったが、報告の準備をしながら、“Equity Literacy”や“CQ(cultural intelligence)”といった概念にたどりついたので、そこから問題提起を行い、聴衆からも反応があった。自分にとって勉強の機会になったし、ほっとしている。

準備をしながらずっと考えていたのは、何をどのようにすれば、きちんと「比較」したと言えるのか、そもそもなぜ文学や文化を「比較」するのかといったことであり、さらに言うなら、こうしたことを教える意義はどこにあるのだろうかといったことである。比較文学ばかりでなく、文学をどのように教えるのか、文学研究の社会的な役割とは何なのかといったことに関して、私自身は、日々、考えを巡らせる他ない状況に置かれている。

(次ページにつづく)

(前ページのつづき)

いまだ試行錯誤のなか、今年は「対話」をテーマにして、学部一年生向けの科目に取り組み始めた。文学史や文学理論の話はせず、演劇や哲学、組織運営やファシリテーション、異文化理解や紛争解決の場面で登場する「対話」の役割について、文献をふまえて学生たちに考えてもらっている。まだ学期が終わっていないので、この先どうなるか、自分でも分からない。そのうち、みなさんにお話しできるかも知れないし、成果についてはまた次の機会にとなっているかも知れない。

すでに九州大学に着任して二〇年。研究・教育環境の変わりようには驚くばかりである。大学院に進学した年から考えれば三〇年。いまの状況を知ったら、当時の自分は何と言うだろう。こういう調子で書いてしまうとついつい悲観的になるが、見方を換えれば、この「世界」に足を踏み入れてから、まだ三〇年しか経っていないとも言える。とはいえ、今後何かできるだろうか。こんな堂々巡りを繰り返している。

愚痴めいたことを書き連ねてすいません。九州支部のみなさんにお会いする機会も減ってしまったので、近況報告としてご笑覧、ご寛容のほどを。

---

"文学をどのように教えるのか、文学研究の社会的な役割とは何なのかといったことに関して、私自身は、日々、考えを巡らせる他ない状況に置かれている。"

---

## 書評 林信蔵、中村翠、川上啓太郎編著『言葉を奏で、音楽を読む一世紀転換期の〈フランス・オペラ〉をめぐる〔春秋社音楽学叢書〕』春秋社、2025年10月

松枝 佳奈（九州大学）

文学と音楽を愛好する読者なら誰しも本書のタイトルに心惹かれ、魅せられるだろう。「言葉が奏でる音楽を味わい、音楽を物語として読むという意味のタイトルを冠した」同書で扱われるのは、「文学と音楽の相関関係についての諸問題」（p.3）である。本書は、現・九州支部長の林信蔵氏が研究代表者を務める科学研究費基盤研究（C）共同研究の成果として上梓され、比較文学に基づく比較芸術研究で今後必携の一冊となるに違いない。

(次ページにつづく)

(前ページのつづき)

---

"本書のような研究成果がさらに蓄積され、ゾラとブリュノーが心血を注いだオペラ作品・楽曲の上演に立ち会う日を期待せずにはいられない。"

---

本書は序章を含む9本の寄稿論文と2本の学術コラムから成っており、筆者は以下のとおりである。日仏の音楽文芸論を専門とする林氏を筆頭に、エミール・ゾラを専門とする仏文学者の中村翠氏（本会会員）と福田美雪氏、近代フランスを専門とする音楽学者の成田麗奈氏と川上啓太郎氏、近代ドイツを専門とする音楽学者の広瀬大介氏、ジュール・マスネのオペラをめぐる音楽と文学を専門とする笠原真理子氏、ゾラやモーリス・バレスらと音楽の関係に早くから注目して研究してきた田中琢三氏（本会会員）が論文を担当した。本会会員の寺田寅彦氏と倉方健作氏は仏文学の専門家として短いコラムとして収録するには惜しいほどに良質な論考を寄せた。このように日仏比較文学やゾラを中心とする仏文学、音楽文芸論、音楽学で活躍する多くの中堅・ベテランの研究者が集い、世紀転換期の〈フランス・オペラ〉をめぐる多岐にわたる充実した議論が展開される。その骨子となるのは、現在では上演機会に恵まれることのないゾラとアルフレッド・ブリュノーの共作オペラ《メシドール》をはじめとする近代フランスの作家たちと作曲家たちの交歓と交感の軌跡の再評価である。

林氏は、以上のような各分野の優れた専門家たちをさながら卓越した「独奏者(ソリスト)」のように適材適所で際立たせながら、一つの壮大な音楽に束ねる「マエストロ」と称すべき役割を見事に果たした。そのため、本書はえてしてこのような論文集に見られる各論の寄せ集めや総花的な構成から逃れ、各章で扱われるテーマや議論がごく自然な形で相互に響き合い、有機的に結びついている。その例として、文学と音楽の「紋中紋」を扱う林氏の第1章と中村氏の第6章、川上氏の第7章や、リヒャルト・ワーグナーを中心とするドイツ音楽とフランス文学・音楽の相関関係を取り上げた広瀬氏の第3章と田中氏の第8章、近代フランス文学・音楽におけるオリエント趣味を論じた福田氏の第4章と川上氏の第7章などが挙げられる。

そして林氏の序章が、本書の理論的位置付けを明確にすることにより、上述の事例分析を行った多数の論文・コラムを一つにまとめ上げている。特に「音楽が外界や現実を描きうるのか」という音楽の「相同性」をめぐる問題や文学と音楽の客観的類似性について、フランスの音楽学者であるクリスチャン・アカウイやジャン＝ジャック・ナティエらの理論を明晰かつ批判的に整理しながら、以下のとおり本書を位置付けた点は出色であろう。

(次ページにつづく)

(前ページのつづき)

「(前略) 差し当たって、当該の文学および音楽の作品レベルの特徴を、それぞれ適切に限定し、十分に定義された形で描き出し、両者に「相同性」を見出そうとした作家の意図を忖度すればいいのである。(中略) 当該箇所前後関係や関連していると思われる間接的な証言、ジャンルの慣例などに照らして、十分な蓋然性が確保できる部分を考察の対象にするように心がけたい」(p.11)。このように、林氏は学術上誠実かつ謙虚に実証的な考察に徹する態度を示しつつも、文学と音楽の相関関係をめぐる比較芸術研究理論の将来的な体系化を静かに見据えているのである。

本書を読み進めながら、音楽配信サービスや動画投稿サイトを用いて各所で取り上げられた音楽に耳を傾けたが、ゾラとブリュノーの共作オペラ《メシドール》の楽曲に出会うことはついになかった。本書のような研究成果がさらに蓄積され、ゾラとブリュノーが心血を注いだオペラ作品・楽曲の上演に立ち会う日を期待せずにはいられない。

## 2025 年度九州支部春季大会印象記

林 信蔵 (福岡大学)

2025 年度日本比較文学会九州支部春季大会は、7 月 5 日に九州産業大学で開催された。会場校の石川泰成先生からご挨拶いただいた後、研究発表へと移った。

最初に、熊本大学大学院院生、趙海霞氏が「武田泰淳『司馬遷』再論——原稿・草稿を手がかりに」と題して発表した。武田泰淳の『司馬遷』の初版の「結語」について複数の原稿・草稿と比較しながら、その歴史認識における揺らぎを浮き彫りにしようとする実証的な研究であった。

次に、九州大学大学院、汪憶霏氏が「日本人における創作童話と周作人の接触——その翻訳活動と童謡観を中心に」と題して発表した。近代中国における著名な文学者である周作人が日本の童謡作家との交流でどのような詩作上のインスピレーションを紡ぎ出そうとしていたのかを、とりわけ童謡が持つプリミティヴィズム的側面とでも呼ぶべき部分を通じて素描しようとする野心的な試みであった。

最後に、長崎外国語大学の孫平先生が「日本の社会派推理小説と中国の法制文学の交錯点——「制度」と「物語」の構造を中心に」と題して発表した。日本の社会派推理小説と中国の法制文学という二つのジャンルの共通点と差異に注目し、両者が「犯罪」や「制度」について注目する点では共通しているが、社会派推理小説は、社会制度の限界や矛盾を批判的に描こうとするのに対して、法制文学は制度の遵守意識を高めようとする啓発的意図が見える点において異なると主張した。未開拓の分野を扱った先取的な発表であった。

(次ページにつづく)

(前ページのつづき)

以上のような、充実した研究発表の後、休憩を挟み、合評会『比較文学論集：日本・中国・ロシア 金原理先生と清水孝純先生を偲んで』が行われた。当該著作は、日本比較文学会九州支部において、大きな役割を果たした金原先生と清水先生の追悼を意図して編まれた共著であり、九州支部前支部長の西槇偉先生の監修のもと、支部会員の方々の論文が収載された本格的な比較文学の論文集となっている。

西槇先生から合評会の趣旨説明があった後で、孫平先生と中原綾先生からの批評があった。お二人とも、充実した準備資料をもとに、内容にも踏み込んだ指摘があり、執筆者としても学びがあった。また、清水先生のご長男で、清水先生と最後の時間を多く共有した清水御狩氏（岩波書店）が登壇し、研究者としてだけでなく、父としての清水先生を語っていただき、非常に印象深かった。さらに、金原先生・清水先生との思い出について書いたエッセーの執筆者や両先生と交流があった方々からのメールやお便りを西槇先生が紹介してくださった。両先生の人々を結びつける力に改めて思いを馳せ、この共著の意義を再認識した時間となった。

その後、大学近くの居酒屋で懇親会を行い、新入の支部会員も交えて、大会に参加した皆さんと語り合うことができた。

# 秋季大会プログラム

## 2025 年度日本比較文学会九州支部秋季大会

日時：2025 年 12 月 6 日（土）13:00～18:10

開催方法：対面・オンライン併用

（オンライン参加用のリンクは後日参加希望者に送信します）

九州女子大学 耕学館

発表・総会会場：2 階 E205 教室

幹事会会場・休憩・談話室：3 階 E320 会議室

〒807-8586 福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘 1 番 1 号

当日のお問い合わせ：大場（携帯）090-9483-1989

博多駅から特急で約 30 分、あるいは小倉駅から快速で約 20 分で折尾駅に着きます。

折尾駅から徒歩で約 10 分、北に歩くと九州女子大学があります。サンリブ折尾の向かいにあります。



| JR利用（JR主要駅～JR折尾駅まで） |             |         |            |         |
|---------------------|-------------|---------|------------|---------|
| JR 博多駅              | JR 小倉駅      | JR 下関駅  | JR 大分駅     | JR 新飯塚駅 |
| 特急 約30分<br>快速 約45分  | 快速 約20分     | 普通 約40分 | 特急 約1時間35分 | 普通 約40分 |
| ↓                   | ↓           | ↓       | ↓          | ↓       |
| JR折尾駅               |             |         |            |         |
| 徒歩 約10分             | 北九州市営バス 約3分 |         | タクシー 約3分   |         |
| ↓                   | ↓           |         | ↓          |         |
| 九州女子大学・九州女子短期大学     |             |         |            |         |

図 2 九州女子大学 交通アクセス

懇親会会場：姉弟乾鍋

福岡県北九州市八幡西区折尾 4-2-18 ORIO 駅前ビル 2F

電話：093-616-2808

折尾駅から徒歩 2 分の位置にある中華料理店です。



図 3 懇親会会場周辺地図

## 秋季大会プログラム

プログラム：

〈幹事会〉 12：00-12：50

開会 (13：00)

総合司会

林 信蔵 (福岡大学)

開催校挨拶

大場 健司 (九州女子大学)

〈研究発表〉

(1) 13：10-13：45

「羽衣伝説の近代における変容——菊池寛「羽衣」(1924)を例として」

陳 竹 (長崎外国語大学)

司会：頼 怡真 (九州大学非常勤)

(2) 13：45-14：20

「『秋風秋雨人を愁殺す——秋瑾女士伝』とその周辺

——文化大革命に対する武田泰淳の言説の揺らぎ——」

趙 海霞 (熊本大学大学院)

司会：中原 綾 (九州産業大学非常勤)

休憩 14：20-14：30

(3) 14：30-15：05

「古事記における日本神道とカトリックの比較——ユング心理学の視点から」

緒方 秀樹 (佐賀女子高等学校 神村学園高等部)

司会：林 信蔵 (福岡大学)

(4) 15：05-15：40

「声を得た女たち——マーガレット・フラーと与謝野晶子にみるジャーナリズムへの越境」

松原 留美 (九州女子大学)

司会：松枝 佳奈 (九州大学)

休憩 15：40-15：50

〈シンポジウム〉ジャンル越境の誘い——総合的な比較芸術論に向かって

15：50-17：50 パネリスト・コーディネーター

林 信蔵 (福岡大学)

パネリスト・登壇順

松枝 佳奈 (九州大学)

大國 眞希 (福岡女学院大学)

本浜 秀彦 (文教大学)

〈総会〉 17：50-18：10

司会 松枝 佳奈 (九州大学)

〈閉会の辞〉

林 信蔵 (福岡大学)

〈懇親会〉 18：30～

予算：5000 円 (院生は 1500 円)

## 秋季大会プログラム

### 発表要旨

#### 研究発表（１）

陳 竹「羽衣伝説の近代における変容——菊池寛「羽衣」（1924）を例として」

羽衣伝説は、日本や中国を含む世界各地に流布されている昔話であり、その最古の記載は中国の志怪小説『搜神記』に見られるとされる。近代以降、この説話はしばしば童話や民話の題として扱われてきた。1924年、菊池寛は短編小説「羽衣」を雑誌『女性』に発表した。当時の菊池は、『真珠夫人』（1920）の成功や『文藝春秋』の創刊（1923）を経て既に人気作家として認知されていた。本作「羽衣」も当然ながら1920年代における菊池の文芸観を反映していると考えられる。しかし、同年に発表された戯曲「丸橋忠弥」などと比べると、本作は必ずしも大きな注目を集めてこなかった。そこで本発表では、日本や中国における羽衣伝説の系譜を踏まえ、「羽衣」における原典からの改変や作品のオリジナリティーを明らかにする。これにより、1920年代の菊池の文芸観を再評価できると考えられる。

#### 研究発表（２）

趙 海霞「『秋風秋雨人を愁殺す——秋瑾女士伝』とその周辺  
——文化大革命に対する武田泰淳の言説の揺らぎ——」

本発表は、従来、秋瑾に関する伝記として評価されてきた武田泰淳の『秋風秋雨人を愁殺す——秋瑾女士伝』（『展望』第100号、1967年4月～）を、プロレタリア文化大革命に対する泰淳の見解を示すテキストとして読み解くことを試みるものである。これまで、マスメディアに発表された泰淳の文革論およびそれに対する評価から、彼は文革を比較的楽観的に捉えていたとされてきた。しかし、同行者による旅行記や『秋瑾女士伝』、さらには雑誌記事など、異なる種類のテキストにおける泰淳の文革言説を検討することで、その言説がテキストの性質によって異なる特徴があることを明らかにしたい。その上で、歴史的文脈を踏まえつつ、泰淳の発言や姿勢に込められた意図を解明することを目的とする。

## 秋季大会プログラム

### 研究発表（3）

緒方 秀樹「古事記における日本神道とカトリックの比較  
——ユング心理学の視点から」

私はこれまで遠藤周作の作品研究をしてきたが、その研究の過程でカトリックについて研究をする機会があった。また、自分が日本人であることから神道にも興味を持つとともに、現存する日本最古の古事記についても造詣を深める機会があった。この狭間で、かつて遠藤の『深い河』の研究をした際、彼がユング心理学に救われたという記述が目にとまった。そこで遠藤がどのように救われたのかを探るために、遠藤が自他共に認めるカトリックの母性の救いについて、改めて言及する必要があると感じた。そして、それとともに日本人でもあった遠藤を客観的に観るために、あえて古事記に代表される日本神道の母性とカトリックにおける母性を比較する必要があると感じたのである。

今回の発表では、あえて『深い河』という小説から離れ、ユング心理学者の『古事記』における母性の解釈とカトリックにおけるマリア像に焦点を当て、二つの宗教の比較を試みたい。

### 研究発表（4）

松原 留美「声を得た女たち——マーガレット・フラーと  
与謝野晶子にみるジャーナリズムへの越境」

本発表は、19世紀アメリカの思想家・作家マーガレット・フラー（Margaret Fuller, 1810–1850）と、明治・大正期日本の詩人・評論家与謝野晶子（1878–1942）を比較し、両者のジャーナリズム進出を通じた女性言論空間の形成を考察するものである。フラーは『ダイアル』誌の編集者として超絶主義思想を世に広め、女性として初めて主要新聞『ニューヨーク・トリビューン』の特派員を務めた。一方、与謝野は『明星』『婦人公論』などを通じて、家庭・国家・戦争をめぐる女性の発言権を拡張した。両者に共通するのは、文学的感性と倫理的理念を武器に、男性中心の公的言論領域へと「越境」した点である。本発表では、彼女たちの言説を比較し、文学と社会実践が交差する場としてのジャーナリズムを、近代女性の主体形成の契機として再評価することを目的とする。

## 秋季大会プログラム

### シンポジウム：ジャンル越境への誘い——総合的な比較芸術論へ向かって

「僕は文章を書く方法というか、書き方みたいなものは誰にも教わらなかったし、特に勉強もしていません。で、何から書き方を学んだかという、音楽から学んだんです」と村上春樹は述べている。村上にとって、音楽と文学は、前者が後者のモデルとなるほど親しいものだということだ。しかしながら、ジャン＝ジャック・ナティエは「ベートーヴェンの《熱情》の冒頭は、かつて一度もわれわれに「長いこと私は早く横になることにしていた」と言ったことはない」と繰り返す。ナティエに反論して「『失われた時を求めて』を読んでいると妙なる音楽が聞こえてくるのだ」という人もいるかもしれないが、そういった人には、耳鼻咽喉科を受診することをお勧めした方がいいだろう……

文学と文学に隣接する諸芸術ジャンルとの相関関係を考察する研究を比較芸術論と呼ぶならば、比較芸術論には、さまざまなレベルの議論が存在する。文学と絵画・写真など映像芸術との関係ならば、両者とも外界の事物を参照する芸術であるため、直感的に相関関係を思い描きやすい。一方、文学と具体的な事物を表現しない音楽との関係は、直接的な形では両者を関係づけにくい。このように表現対象の共通性が高い芸術と低い芸術では、必然的にアプローチのありようが異なるはずなのだが、こういった「比較芸術論の比較」は、今日まで、必ずしも本格的には行われていなかったように思われる。本シンポジウムは、「比較芸術論の比較」へと行き着くための準備段階として、多様な分野を持つ研究者が集う九州支部の先生方の力を借りて、さまざまなジャンルにおける比較芸術の試みの一端を示すことを意図している。

具体的には、林の問題提起の後で、九州大学の松枝佳奈先生が、イワン・トゥルゲーネフの音楽界との接触とその体験の文学創造に対する反映を、福岡女学院大学の大國眞希先生が、太宰治の文学作品における色と音楽の交錯が織りなす多様なメタファーの作用や作家のアバターとしての音楽家イメージを、文教大学の本浜秀彦先生が、手塚治虫の漫画作品における文学性についてそれぞれ報告いただく。その上で、フロアーの先生方にも加わっていただき、どのような比較芸術の試みが可能であるかについて議論を交わす中で、九州支部を起点として総合的な比較芸術論についてどのような形の研究が可能なのか模索していきたい。

（文責 林 信蔵）

## ニューズレター編集担当より

今号より編集を担当することになりました荒木雪葉です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、『日本比較文学会九州支部 NEWSLETTER』第7号が発行されました。今号では、石川泰成先生より学問に取り組む姿勢を正したくなる巻頭言をご寄稿いただきました。また波瀲剛先生にはご自身の学問のこれまでとこれからに関する学術エッセイをご執筆いただきました。そして松枝佳奈先生には読み応えのある書評を、また林信蔵先生には今年度春季大会の印象記をお寄せいただきました。次号も、皆さまの積極的なご寄稿をお待ちしております。

2025年12月6日（土）、九州支部秋季大会が九州女子大学にて対面・オンラインの併用で開催されます。皆さまにお目にかかりますことを心待ちにしております。

荒木雪葉（北九州市立大学）

### 日本比較文学会九州支部 NEWSLETTER 第7号

発行日：2025年11月18日

発行：日本比較文学会九州支部

日本比較文学会九州支部 HP:

<https://homepagekumadai.wixsite.com/kyushu-shibu>

日本比較文学会九州支部支部長

林 信蔵（福岡大学）

[shinzohayashi@adm.fukuoka-u.ac.jp](mailto:shinzohayashi@adm.fukuoka-u.ac.jp)

日本比較文学会九州支部事務局

819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744

九州大学大学院比較社会文化研究院

松枝佳奈研究室 [matsueda.kana.460@m.kyushu-u.ac.jp](mailto:matsueda.kana.460@m.kyushu-u.ac.jp)